

# LSC NEWS LETTER

Learning Support Center 広島修道大学  
学習支援センター

2018 No.26

広島修道大学  
Hiroshima Shudo University

## Contents

学習支援—10年、ひと区切り…1 交差するまなび— コモンズから見た学生の成長…2 第32回 初年次教育セミナー…4  
LSCドキュメンタリーアワー報告・入学準備学習プログラム キャンパス学習「新聞から学ぼう」を実施して…6 LSC資料紹介…7  
<学び★サブリ>いのししから学ぶメタ認知・学会報告「大学教育学会 2018年度課題研究集会」…8

## 学習支援 —10年、ひと区切り



○ 学習支援センター  
加利川 友子

**学**習支援センター(以下、LSC)

は、2005年、少子化による受験生減少と入試種別の多様化による学力低下、リメディアル教育の必要性を背景に、入学前および入学後の学習相談ならびに学習支援、教育方法の企画・開発にかかる支援・研究などを主な任務として設置されました。多くの大学から視察依頼があったことからしても、早い時期での設置といえるでしょう。

当時、私は教務課(現在の教学センター)で、授業や履修に関する業務を担当していました。それらの業務自体、学生の学びを支えることと考えていましたので、「学習」を「支援」する「センター」がどのようなところで、何をする部署か、イメージすることができませんでした。履修の仕方や身分異動に関する相談は日常的に経験するものの、大学での学習の仕方といった学習支援は、まったく新しい概念だったからです。以来、11年間、職員として、LSCでの学習支援に関わってきた経験から、学習支援について記してみたいと思います。

**当**初、LSCはリメディアル教育を意識し設置されましたが、「基礎学力の充実に向けた取り組みの強化」の一貫として、「初年次教育を通じた自立的学習者の育成」に焦点をあてた取り組みに重点を置くようになりました。LSCのこれまでの取り組みはすべて、ここに収斂するものと言えるでしょう。カリキュラムと連動させた「修大基礎講座」の実施、それを支えるための「初年次教育セミナー」、「教育力アップセミナー」の開催、共通教育や専門教育に関しては、担当教員による「オフィスアワー」の実施、学習アドバイザーによる学習スキルに関する「ワークショップ」や「スタディグループ」の実施などがそれに当

たります。

一方、上記の取り組みの中で感じたことは、LSCの目指す学習支援—自立的学習者の育成—には、教職員の協力・連携が不可欠だということです。

「修大基礎講座」で強調されてきた教職協働ですが、職員担当部分と教員担当部分といった枠組みだけを整え、後は個人におまかせでは、十分に機能しないでしょう。特に、部局授業を担当する職員にとって、単なる負担感で終わらないような取り組みと働きかけが必要だと考えます。

学習アドバイザーの実施する「ワークショップ」や「スタディグループ」も、単体で力を発揮できるものではありません。授業につながるようなしくみや教員との連携が必要です。これまで蓄積してきた学習スキルに関する資料や授業案などの提供、教員と協働で教材を作成するなど、教員との連携が大きな力となるでしょう。

LSCの現在までの取り組みは、「初年次教育を通じた自立的学習者の育成」という目標を体現するために創り出されてきたものです。しかしながら、開設当時と比較すると、大学の置かれた状況、学生の状況など、大きく変化しています。それに伴って、LSCも引き継ぐべき点と変わるべき点を整理する時期に至っているのではないのでしょうか。幸いにも、LSCは教員(センター長・次長)、学習アドバイザー、職員といった異なる立場の人員で構成され、教職協働が日常的におこなわれる環境にあります。小さな組織だからこそ議論することも可能です。異なる視点で議論する過程から共通の認識、新しい考えや取り組みが生まれてくるものです。そして、新しく生まれた考えや取り組みを大学全体に働きかけていく役割を果たしていくべきです。

かつて、「初年次教育を通じた自立的学習者の育成」に向けて躍起になったときのように、今の修大、今の修大生にふさわしいLSCとなることを希望します。

## ●特集 学生の学び

## 交差するまなび

## —— コモンズから見た学生の成長 ——

学習アドバイザー 是澤 克哉

学習アドバイザーとして私が赴任して3年が過ぎようとしています。当時は、2号館2階から引っ越して一年という短い月日だったことや、専任の英語の学習アドバイザーが半年間不在だったこともあり、まなびコモンズを利用する学生が少なく、「コモンズのスペースは学習支援センターに広すぎるんじゃないか」、「いつもがらんとして寂しい」と言われた時期がありました。その頃から今まで、常に考えていることは、コモンズのスペースをいかに多くの学生に利用してもらい、彼・彼女らの成長につなげてもらうかでした。

コモンズの語源となった英語のcommonは、com「共に」とmon「行き交う」という二つの意味が組み合わさったことばです。現在では「共通の」という意味が一般的ですが、もともとは「互いに行き交う」という意味で、そこから「よく出会う」、「よく見かける」と派生しています。また、コモンズが名詞で使われる時は、場所を意味し、「複数の人が共同で利用している場」になります。つまり、コモンズとは個人が学習するための場ではなく、4学年、7学部13学科（専攻）の多様な学生たちが互いに行き交い、大学でのまなびを通して出会う開かれた場所であるべきなのです。

まなびコモンズは学習するのに恵まれた空間です。12の可動式のテーブルと椅子、ホワイトボードやイーゼルパッド、文具に毛布まで、いつでも使用できます。またグループでの予習・復習、勉強会、学習アドバイザーによる学習相談やレポート相談、ワークショップも開催されています。

今年度もまなびコモンズでは様々な学習の形が生まれました。学習相談件数は804件（英語433件、日本語371件）でした。また、ワークショップは前期の11講座に延べ325名、後期の12講座に延べ67名の学生が参加、スタディグループでは前期の8タイトルに延べ203名、後期の7タイトルに

延べ303名が参加しています。さらには、まなびコモンズで毎朝の読書を続け、英語多読マラソンで100万語を読破した学生も現れるなど、現在まなびコモンズは、多くの学生たちの多様な学びの場となっています。



今回の特集では、まなびコモンズでよく見かけた5名の学生たちの声を拾い、彼・彼女たちが出会った様々なまなびと成長を紹介します。



## 英語は楽しんだもの勝ち

田中 彩季  
(法学部国際政治学科4年)

私は、大学3年生の後期に参加した多読ワークショップで多読の方法を知りました。それは「辞書を引かない、分からないところは飛ばす、つまらなければ別の本にする」というものでした。今まで難しい洋書を頑張って読んでいたので、「絵本からで良い」というやり方はとても新鮮でした。試しに絵本を読むと面白い上に読み易くてはまりました。朝30分は読むようにしましたが、疲れている時は1ページだけの日や、全く読まない日もありました。いつの間にか読むスピードが上がり、1万語以上の絵のない物語を苦も無く読めるようになっていました。特に多読の効果を実感できたのはTOEICで、問題が読み易くなりスコアが上がりました。とてもうれしかったです。私は多読を続けてきて本当に良かったと思っています。英語が苦手な方、洋書を読んでいるけれど楽しくない方、その本はあなたのレベルに合っていますか？ 英語は楽しむのが一番です！ぜひ多読のやり方を試してみてくださいね！

## ◆過去3年間の学習相談件数の推移

	2016年度 前期	2016年度 後期	2017年度 前期	2017年度 後期	2018年度 前期	2018年度 後期
英語	213	316	330	185	209	224
日本語	252	118	227	169	205	166
合計	465	434	557	354	414	390

\*2018年度後期は2019年2月までの合計

## ◆スタディグループ一覧

曜日	月	火	水	木	金
前期	小論文 Rugger TOEIC	ディベート・クラブ	キソエイゴ101	プレゼン マスターズ	TOEIC Masters 日本語検定
後期	TOEIC® L&R	新聞を読もう	キソエイゴ101	プレゼンの目 プレゼン マスターズ	日本語検定

\*「話せばわかる」は前期・後期とも不定期開催



## 時間管理の大切さ

山本 泰輝  
(商学部商学科4年)

私は学習支援センターの利用を通して、時間を管理する能力の成長を実感しています。

いつも思いつきで行動する私は、小さい頃から、計画を立て、それ通りに実行することが苦手でした。大学に入学し、試験勉強やレポート課題等と一度にやるべきことが増え、学習相談を受けたのが、学習支援センター利用のきっかけです。

学習支援センターでは、学習アドバイザーに時間管理の基礎(PDCAサイクルなど)からアドバイスしていただき、次第にやるべきことが重なっても、ストレスなく学習を進められるようになりました。また最近では、就職活動をする中で、大学の課題提出、アルバイト等を同時進行することができ、結果志望していた鉄道企業からも内定を頂くことができました。

春から私は、駅員として働きますが、定時運行をサービスとする鉄道において、時間管理の意識は大切であると考えています。学習支援センターで学んだことを糧に、お客様に満足していただけるサービスを提供していきます。



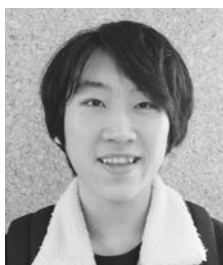
## 「話せば分かる！」 で話して分かった！

星尾 涼介  
(人文学部人間関係学科心理学専攻4年)

「話せば分かる！」は、学校生活や社会的なテーマについてディスカッションを行うスタディグループです。大学でディスカッションを学べる場を探していたところ、既存のグループとは違うものを自分で作ってみたいら良い勉強になるのではないかと考えたのが始まりでした。2017年7月12日に第1回を開催し、これまでに計10回、学習アドバイザーに企画運営や進行についてのアドバイスをもらいながら、様々な学部・学年の学生と回を重ねてきました。

今までは思い付いたことをなかなか行動に移せませんでしたが、今回、「話せば分かる！」を実行でき、自分の考えていたことが目の前で行われている充足感は、何にも言い表せないものでした。計画を実行し、やりきったという経験は自信になり、ゼミでも積極的に話せるようになりました。

学習支援センターと参加者の皆様に厚く御礼申し上げます。話せば分かった！



## 仲間と一緒に勉強する大切さ

山岳 亮介  
(国際コミュニティ学部国際政治学科1年)

私がスタディグループに参加しようと思ったきっかけは、TOEICの勉強により励めるようにという思いからでした。最初は特に深い考えがあったわけではなく、「ただ何となくやってみよう!」という気持ちで参加しました。内容はグループでTOEICの問題をパートごとに解く、というものでした。私は基本一人で勉強するスタンスですが、このグループでは皆と一緒に学べるので一人でやるより楽しく学習できました。また、指導して下さる学習アドバイザーも優しく、懇切丁寧に教えてくれるので英語が苦手な方やTOEICを受けたことがない方でも安心して取り組めると思います。私は1年次の後期に受けたTOEICのスコアが前回よりも300上がり800の大台に乗ることができました。これも一人で勉強するだけでは到達できないスコアであり、学習支援センターのスタディグループのおかげだと思っています。普段の授業とは違いアットホームな雰囲気で行っているのが気になっている方は気軽に参加してみるといいですよ!!



## レベルアップが実感できる場

吉本 絢  
(人文学部英語英文学科1年)

学習支援センターでは様々な講座が開講されています。私はTOEIC対策のワークショップに参加しました。以前は、自分なりの方法で1人で勉強するほうが合っていると思ひ込み、ワークショップと聞くとどこか堅い印象を感じていました。しかし実際に参加してみると、学習アドバイザーとの距離も近く、明るい雰囲気の中で役立つ勉強法を身に付けることができました。英語はもちろん、効率良く解答する時間配分など、実践的な内容を教えていただけるのが学習支援センターのワークショップの魅力です。また、同じように目標を持ち取り組む他の参加者を見て、自身の勉強に対する姿勢を見直す機会となり、モチベーションの向上にも繋がりました。その後受験したTOEICでは点数が大幅に上がり、大きく成長できたと実感しています。今後も英語を強みとして伸ばしていけるよう勉強を続けていきます。



## 初年次教育セミナー

## 第32回 初年次教育セミナー

学習支援センター次長 新本 寛之

2018年度の初年次教育セミナーは、「アクティブ・ラーニング（以下、AL）の再検討」を統一テーマとして進めて参りました。過去2年間、ALをキーワードに展開してきたセミナーの振り返りも含めて、より充実した授業運営の実現を目指し、その具体的な取り組みを学ぶことが目的です。第1回は10月17日(水)に「障がい学生にとってのアクティブ・ラーニング」と題し開催しました(前号掲載)。

**続**いて、ここにご紹介する第2回目(通算32回)は、12月19日(水)に「より良い学びを提供するために～実例から学ぶ～」をテーマに開催しました。第1回に引き続いて、熊本大学大学教育統括管理運営機構准教授の川越明日香先生を講師としてお招きしました。このたびもご多忙にも関わらずご快諾いただきました川越先生に深く感謝申し上げます。

**さ**て、第2回目は、タイトルの中にある「実例から学ぶ」という点が大きなポイントであり、セミナーとして初めての試みとなりました。川越先生が本学で行われている授業を実際に参観し、授業設計という観点に立ち、AL型授業として良い点や改良点を見出すというシナリオでした。画期的かつ授業改善に向けて効果的な試みではありますが、川越先生が参観可能なのはセミナー当日の午前中のみ、加えて初年次教育授業をできるだけ優先したいという制約の中、参観に協力可能な教員がどれだけ存在するかが大きな問題でした。

**と**ころが、学習支援センターの心配をよそに、授業改善に向けて前向きな教員が複数おられました。商学部から山本和史先生、法学部からは伊永大輔先生、鄭芙蓉先生、山田健吾先生、国際コミュニティ学部から佐渡紀子先生の合計5名の方々です。先生方のおかげをもちまして、このたびのセミナーは成立しました。セミナーの主旨へのご理解ならびにご協力に心よりお礼申し上げます。

授業を参観された川越先生によれば、本学教員の授業レベルはいずれも高いものと評価され、それぞれの先生方の良い点を複数挙げられました。例えば、授業の流れが明確、資料の準備力が高い、踏み込んだ問いにより、学生の思考が活性化されている、学生への安心感が高い、論点整理がなされている、学生の役割が明確、講義と演習のバランスが良い、振り返りの時間が確保されている等々。川越先生のご指摘を私自身の授業内容と照らし合わせながら聴講することで、足りている部分、足りていない部分をあぶり出すことができました。

一方で、厳しくも建設的な数々のアドバイスも頂戴しま

した。その中で、特に印象に残ったのはAL型授業内で学生にいか「ゆらぎ」を与えるかという点です。つまり、「おぼえる」、「わかる」の段階で終わらせるのではなく、「わかった」知識を活用ならびに再思考することで「ゆらぎ」を繰り返し起こさせ、その回数によってさらなる深い学びに結びつかせるということです(図1)。そのしかけがレポート作成、グループワーク、実習、プレゼンテーション、他者からの質問であったりするわけです。

学生時代に専門学校講師として苦手な科目を担当することがありました。準備に時間を費やし、その上で他者に教え、他者からの質問を通じて「ゆらぎ」を繰り返す中で、苦手科目を自分に落とし込んでいくプロセスを体感したことを思い出しました。川越先生の解説に妙に納得してしまいました。

セミナー内で、川越先生が「良い授業とは？」という問いを出される場面がありました。受講者の思考が活性化される瞬間です。先生はその解として「その問いについて考え続ける、そして改善し続ける」とことと語られました。そのために教育者が授業改善について気軽に話ができる「教育を語る文化の創造」が重要だと指摘されました。そういう意味で、このたび授業参観を経て、その担当教員を囲み「より良い学び」について参加者全員で議論および課題共有できたことは、その「創造」に向かうための大きなヒントを得たように思います。

**結**びになりますが、今回のセミナーの参加者は教員5名、職員10名の合計15名でした。お忙しい中、お時間をつくってご参加いただいた教職員の皆様に厚くお礼申し上げます。

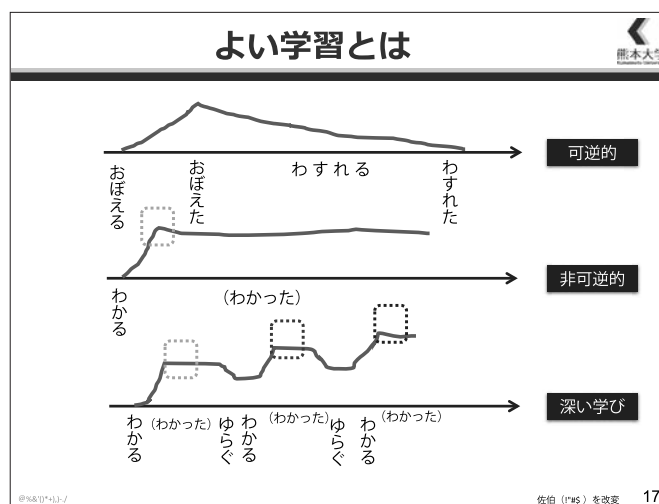


図1「よい学習とは」  
資料：セミナー配布資料より。



## 第32回 初年次教育セミナー参加報告



法学部教授  
伊永 大輔

法律学科1年次生を対象とした初年次セミナー（後期開講）は、大学生活にも慣れてきた学生にとって、法律科目でないだけに、重要であることを認識しづらく、つつい気が緩みがちな授業となっている。そのため、まずは問題意識を喚起して学生のモチベーションを高めるとともに、講義と演習のバランスの取れた形態の授業を目指して取り組んでいた。

そうしたところ、授業参観を通して川越先生からアドバイスを頂ける機会を得た。参観自体は授業終盤の短い時間に過ぎなかったが、演習後に各個人の振り返り時間を設けていたことを評価してくださったり、グループ間の感想の共有を勧めてくださったりと、授業の構成要素を手探りで模索している身としては、改善のヒントを得られる結果となった。

自律的に授業改善するのは教育者の常ではあるものの、ときには専門的な見地から改善の視座を伺うのも、また良いものである。学生をやる気にさせるノウハウを教わるとともに、個別の指摘もとても参考になった。



法学部准教授  
鄭 芙蓉

第32回初年次教育セミナーに参加しました。今回のセミナーは、講師が実際に本学の授業を参観してアドバイスをを行い、その後セミナー参加者で情報を共有し、自分自身の授業に応用していく設計となっています。学習支援センターによると、本学での初めての試みだそうです。

まず午前中に、私の授業を講師の川越先生に参観して頂きました。法学部の初年次セミナー授業はディベート授業とライティング授業からなり、二人の教員がペアになっていずれかを担当することになっています。私が担当したのはディベート授業でした。授業計画では2回の授業を通じて一つのディベートを行い、1回目の授業を準備の回、2回目の授業を本番の回としていますが、川越先生が参観したのは第3回ディベートの1回目の準備の回でした。授業後、「先生の話し方がとても温かみがあり、学生に安心感を与えられる」、「詳細な授業資料があり、

全体の進み方と内容が分かりやすい」、「ディベートの方法が具体的に提示してあり、初年次の学生にとっては分かりやすい」などの肯定的な評価をたくさん頂きました。一方、「予習課題として読み込んでくるところまで行けないか」という助言も頂きました。

午後のセミナーでは、学習プロセス、授業を作るコツ、授業改善の指針となる「7つの習慣」などについて学びました。私にとって一番印象深かったのは、内化（講義を聞く、文献を読む）→外化（グループで討論）→内化（復習）という内化と外化の往還の考え方の提示でした。ゼミでは、自分で考えてみる→グループで議論・発表する→自分の答案をまとめるということは無意識で行っていますが、それが「良い学びの理論」に一致していることを知り、大変励まされました。

専門家の先生から授業について貴重なコメントを頂いた、「良い学びの理論」を学んだりして、今回のセミナーは自分の授業を見つめ直す良い機会になりました。企画をしてくださった学習支援センターの皆様へ、心から感謝を申し上げます。



学生センター学生課長  
隴本 武直

### 学生の集中力を持続させる授業

2018年12月19日（水）に開催された初年次教育セミナー「より良い学びを提供するために」に参加しました。講師は熊本大学の川越明日香准教授でした。今回は川越准教授が事前に本学の5名の先生方の講義を参観された感想を基に先生の独自の視点を交えながら「よい授業」とはどんな授業なのかを参加者全員で考えていこうというものでした。

最初に先生は参加者でペアを組ませ、それぞれが思う「よい授業」について意見交換をさせました。その時の私の答えは「学生の集中力を持続させる授業」でした。意味はそのままで、とにかく学生に聞かせないことには始まらないという思いからでした。私は職員なのでこれまで授業をする機会はほとんどありませんでした。しかし今年度から学生センターに異動となり、いきなり「修大基礎講座」の授業を3回行うことになりました。もちろんレジュメがあり、それに従って読み進めれば1コマの授業の時間は過ぎますが、そんな棒読みの授業では学生はすぐに飽きてしまいます。1回目の授業

は自分の口から言うのも何ですがひどいものでした。2回目の授業の時にひとつ気づいたことがあります。私が脱線した話をするときに限って学生たちが真剣に私の話を聞いているのです。脱線と言っても学生が好む最近のネタ等を言うのではなく、実体験から得た教訓的な話をしました。それはただ読み進めている棒読みの言葉ではなく、体験上得た本当に自分が伝えたい内容なので、言葉に人を引きつける力が宿るのだと感じました。具体的な話の内容も、より授業の流れに沿うものとし、これを上手に学生が興味を示しにくい部分と組み合わせることによって、1コマ集中力を保たせることができるのではないか、そう考え3回目の授業に臨みました。これもまた自分の口から言うのも何ですが、3回目は大きく集中力を切らさせることなく授業を終えることができたように思いました。今回のこの報告も脱線気味に自分の感じたことを書き綴ってしまいました。文章に力が宿っていたかは定かではありませんが、今回のセミナーを通してより良い授業をするための方法はひとつではなく、各先生が日々努力され工夫して取り組んでおられることがよくわかりました。ほとんど授業をしたことのない私が授業手法を語ることはおこがましいですが、こうした研修会を通じて本学の初年次教育がさらに充実していくことを切に願っております。



## 第66回 LSCドキュメンタリーアワー 報告

### てしま 「豊島事件と草の根運動」

法学部教授 山田 健吾

豊島（てしま）は、瀬戸内海に浮かぶ人口867人（世帯数438）、面積14.6km<sup>2</sup>の小さな島です。ちなみに広島修道大学のある広島市安佐南区の人口が244,241人（世帯数104,472）、面積117.03km<sup>2</sup>です。豊島は、たぶん、岡山県に近いのですが、「うどん県。それだけじゃない香川県」に属しています。香川県と岡山県の県境の決め方については諸説ありそれはそれで面白いのですが、それはともかく、豊島のすぐそばには、オリーブ、醤油と「二十四の瞳」で有名な小豆島（しょうどしま）とアートの島・直島（なおしま）があり、フェリーで豊島、小豆島、直島あたりへ向かうと、波も穏やかでのんびりした瀬戸内海らしい風景に出会うことができます。

さて、のどかな豊島に93万8千トンもの産業廃棄物が不法投棄されていたのです。この不法投棄は1978年から継続的に続けられ、この不法投棄を行ってきた事業者が兵庫県警に摘発されたのは1990年でした。汚染土壌と廃棄物が豊島から撤去されたのは2017年3月28日でした。この豊島事件については、私の講義でもいつもお話しています。といっても、法学部の講義ですので、「我が国の風景を代表するに足る傑出した自然の風景地」であるはずの瀬戸内海でなぜ産業廃棄物が不法投棄され、それを香川県はいかなる理由で黙認したのか、不法投棄を防ぐことがなぜできなかったのか、といった事柄を自然公園法や廃棄物処理法に関する問題として語ってきました。たぶん、講義でこの話を聴いていた受講生の皆さんはいつもの無味乾燥な法律学の話だと思っていたのではないかと思います。

今回のドキュメンタリーアワーでは、豊島住民が香川県という公権力主体に立ち向かい、ゆたかな島であった豊島を自分たちの手でとり戻すという住民の思いと、その思いを決してあきらめることなく実現させた草の根運動の歴史を、映像をおりませながら参加者の皆さんと追体験し、豊島事件が私たちに提起している課題について一緒に考えました。豊島事件の現実態やその解決に向けた草の根運動の歴史を参加者の皆さんにうまく伝えられたかといえれば心許ないのですが、普段あまり話す機会のない法学部以外の学生の方のご意見や感想は大変勉強になりました。来年度の講義では映像を使ってみようと思います。

## 入学準備学習プログラム キャンパス学習「新聞から学ぼう」 を実施して

学習アドバイザー 斉藤 幸一  
松村 一徳

本学の入学準備学習プログラムは、AO入試等の推薦入試で早期に入学が決定した高校生が、学習習慣を継続し、大学教育にスムーズに移行することを狙いとしています。本プログラムの一つの柱であるキャンパス学習において、2017年度より、学習アドバイザーによる「新聞から学ぼう」を提供しています。これは、LTD（Learning Through Discussion）というアクティブラーニングの技法で新聞を読み込み、新聞を読むことの重要性や面白さを感じてもらうことを狙いとしています。

「新聞から学ぼう」では、まず、出来事・解説・主張といった新聞記事の種類や、文章の特徴など、紙面の構成を学びます。次に、主張を述べる記事を使い、個人で記事の主張・根拠の読み取りに加え、自分自身の経験や身の回りで見聞きしたことなどとの関連も考えます。そして、それぞれが読み取ったことをもとにグループで意見交換し、新聞から知識を得ることの重要性、他者と考えを交流することの面白さに触れていきます。

昨年度と今年度、参加者はメリハリを持って取り組んでいました。個人活動の時間では真剣な様子で一つの記事の主張と根拠を読み取り、自分自身との関連を何とか見出そうとしていました。グループでの意見交換では、先輩である学生アシスタントのサポートを受け、4月から共に学ぶ仲間たちと賑やかに話し合っていました。さまざまな意見から視野が広がり、また意見をまとめることの難しさも体験したようです。新聞を教材に、自分との関連を考え、協同的な読み取りをするのは、高校生はあまり経験したことがない学びのスタイルと思われるかもしれません。参加者にとってよい刺激になったのではないのでしょうか。

「新聞から学ぼう」は未だ試行錯誤の部分もあります。まず、記事の選定が最大の課題です。入学予定の高校生が参加者であることを踏まえ、参加者の思考が活性化される記事とはどのようなものか、相応しい記事を選ぶことの難しさを痛感します。そして、現在は一つの記事を取り上げる形をとっていますが、理想的には現物の新聞をめくりながら、その醍醐味を体験できればよいと考えます。今後、さらに参加者が新聞に慣れ親しめるよう工夫を重ねていきます。

# LSC資料紹介

学習アドバイザー 是澤 克哉

学習支援センターでは、大学教育、初年次教育、アクティブラーニングや授業手法などに関する図書を収集しています。貸出もおこなっていますので、気軽に学習支援センター（協創館1階）までお問い合わせください。

## 『英語多読・多聴指導マニュアル』

(英語教育21世紀叢書)

高瀬敦子著(2010)／大修館書店



この本はタイトルの通り、英語多読・多聴を現在授業で実践している、または今後実践したいと考えている教員に向けた指導書です。著者の高瀬は長年に渡る自身の英語教育の実践から多読・多聴の学習効果を支持しており、その豊富な経験に基づき、指導のポイントを1冊の本にまとめました。

本書は計10章で構成されています。前半の第1章と第2章は基礎編で多読・多聴学習の目的、歴史、効果などが示され、中盤の第3章から第7章までが実践編で、指導のポイント、授業での導入方法、及びうまくいかなかった事例と成功した事例がそれぞれ紹介されています。後半の第8章から第10章は応用編として、評価方法、多読プラスαの学習法、よくある質問に対する回答が記載され、この一冊で多読・多聴に関する必要な情報がほとんどすべて網羅されています。

本書の特徴は、著者の長年の多読・多聴の教育歴から体験した指導法が具体的に示されていることです。たとえば、第10章では、「Q2. 文法も分からない生徒が本なんか読めるのですか? (p. 212)」という素朴な質問に対して、「日本語で本を読めるようになるには、文法の勉強ではなく、たくさん文章を読むことです。…文法を完璧に理解していると考えられる英語の先生達ですら、英語を自在に駆使できないという悩みをもつ人が多いでしょう。これはすべてインプットの量が圧倒的に少ないことが原因だと思われまます。この致命的なインプット不足を補うために行うのが多読・多聴です (p. 213)」と自身の経験談を交えながら的確に回答しています。

また「Q16. 楽しく多読を続けられるように、どのような指導をしたらよいか? (p. 219)」との問いには、「1. 指導者が楽しんで読書すること」と「2. 無理強いをしないこと」と断言しています。興味深いのは、強制ではないが、強い奨励 (strong encouragement) が必要だと述べている点です。自立した読書ができるようになるまでには、学習者を自由にせず、初期段階で本の選び方などアドバイスする必要がある、継続するために勇気づけることが大切だと述べています。このように著者の経験によって裏打ちされた具体的な指導法が随所に見られます。

さらに、32ものエピソードが各所に散りばめられていて、多読・多聴の指導にさまざまな角度を与えていることも特徴的です。これらの挿話の中には現状の英語教育の問題点を鋭く指摘する話もあります。一つ例をあげると、授業に遅刻する学生が、英語で遅刻理由を述べる際に、「sleep, sleep, train late」「寝坊して電車に遅れた」と日頃自分が使っている日本語を英語に置き換えて話す学生が多いそうです。その時に、「私は寝過ぎて電車に乗り遅れました」と著者が言い直すと「I overslept and missed the train. (p.19)」とうまく話すことができるようです。このことから、日本語 (寝坊) と英語 (sleep) を一対一にして覚えて翻訳する訳読授業の弊害を述べています。

のように英語多読・多聴指導の醍醐味がこの一冊に詰まっているといっても過言ではありません。本書を通じて伝わってくるのは、著者の多読・多聴学習への情熱であり、試行錯誤して練り上げた指導法の実践の記録です。まさに教室での著者の息遣いが感じられる良書となっています。

## &lt;学び★サプリ&gt;

2018 Vol. 14

## いのししから学ぶメタ認知

学習アドバイザー 松村一徳

NHKのEテレのある番組が、干支ソングなるものを作っています。今年は「オレ、いのししだし」というテーマです。元日本語教師の私は、そのタイトルに興味を持ちました。なぜ、いのしし「だぜ」とか「だ」のような断定的な言い方ではなく、わざわざ含みを持たせた言い方で終わらせているのだろう、というものです。

その歌は「オレ、いのししだし 来たぜ、いのしし年 long time no see ♪」と展開していくので、韻を踏むためにわざわざそのような歌詞・タイトルにされているのでしょうか。でも、ふつう、話し手が「○○だし」と言ったら、聞く側は「だから何なの」と後に続く言葉を期待するものです。作者は「いのししだし」の後にどのような言葉を続かせるつもりだったのか、このような細かいことがいちいち気になるのは、もはや職業病というしかありません。

ある学校で働いていた時、生徒が時々、「そんな聞いてないし」、「オレじゃないし」、「知らんし」と吐き捨てるように言っていました。「聞いてない」で終わればいいものを、なぜわざわざ「し」を付加するのでしょうか。そして、「聞いてない」よりも「聞いてないし」と

言われる方が少しイラっとするのはなぜでしょうか。

含みを持たせた言い方で終わる現象は日本語の中によく見られます。「今日はちょっと…」という類の表現です。直接的な言葉をできるだけ発することなく、相手に察してもらうことを望むのが日本人なのです。つまり、「そんな聞いてないし」と言った生徒は、その後続く言葉を教師が察してくれることを期待しているのでしょう。ただ、「そんな聞いてないし」の後に続く言葉というのは、どう考えても、逆ギレや言い逃れしている類の言葉しか推測できません。だからイラっとするのでしょ、というのは私の推測です。

日本語の細かいあれこれが気になる職業病は面倒でもありますが、良い面もあります。「なぜこの言い方をするのだろう」ということを突き詰めて考えることで、日本語を客観的に考える癖が身につきます。つまり、自分を客観的に見るメタ認知を鍛えるのにも一役買っていると言えます。

いのししから学ぶメタ認知、自分の日本語を見直してみると、きっと面白い世界が見えてきます。

学び★サプリは学習支援センター掲示板で読むことができます。

## 学会報告『大学教育学会

## 2018年度課題研究集会』

学習支援センター長 森河 亮

2018年12月1日～2日、長崎国際大学で開催された大学教育学会が主催する2018年度課題研究集会に参加しました。統一テーマは「多様な学生が学び、共に成長するキャンパスへ 一国際社会にひらかれ、未来を創る大学の実現一」でした。期間中は、ポスターセッションによる研究発表、記念講演、開催校シンポジウム、課題研究シンポジウムが行われました。この度の集会は大学教育学会が採択した3つの課題研究の報告が行われ、そのうちの2つに出席し、それぞれ本学に照らし合わせて考察する機会を得ました。

「現代のリベラルアーツとしての理数系科目（STEM）の開発と教育実践のために」という課題研究では、理数系の学科といえどもアカデミックライティングが必修化されている大学もあり、自身の考えや研究の結論を他者に適切に、また学術的に不正なく伝える文章が書けないと、そもそも自身の学習や研究が意味をなさなくなる旨の報告が

ありました。本学でも「修大基礎講座」の授業で、ノートテイキングや研究倫理について教えていることもあり、また、近年新たにスタートした理系の健康栄養学科にも通じることであり、今後の初年次科目の授業構成を再考する材料を得ることができました。

「アクティブラーニングを支援する学生アドバイザーの制度・研修・効果に関する実証的研究」という課題報告では、報告のあった各大学での事情が異なるが故に、広く汎用的な知見を提案することは難しい印象を得ました。ただ、学生アドバイザーの成長とモチベーション維持のために宿泊を伴う研修を行うことが有用であることは共通していました。また、学生アドバイザーの確保に関しては、組織というよりも一教員のパーソナリティによるところが大きく、その教員だから故にスムーズに成り立っている感があることが伝わってきました。学習支援センターでの各種の学生アシスタント募集と非常に似ており、教員によっては必要人数の確保が難しい年度があったりしています。

課題研究報告から得られた知見を、今後の学習支援センターの運営に役立てていきたいと思ひます。



Hiroshima Shudo University

Learning Support Center  
**LSC NEWS LETTER**  
広島修道大学  
Hiroshima Shudo University

発行日 2019年3月29日  
発行者 広島修道大学学習支援センター  
〒731-3195 広島市安佐南区大塚東1-1-1 TEL.(082)830-1426  
ホームページ <http://www.shudo-u.ac.jp>  
E-mail [skill@js.shudo-u.ac.jp](mailto:skill@js.shudo-u.ac.jp)